

幼稚園型認定こども園 青藍幼稚園

〒402-0053 山梨県都留市上谷3-6-30 (Tel) 0554-43-3168
園長 花園 綾子 <http://www.seiranyouchien.jp>

令和2年 7月7日 年長組 自然資源を活かした体験活動
～自然資源を活かした活動を通しての子ども達の成長と大人の学び～

活動のねらい

- ・自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ見通しを持って行動してみる（健康な心と体）
- ・自然を身近に感じ発見・驚き・感動を友だちと共有しながら、自ら活動し楽しさを味わう。また、好奇心や探究心をもって考え、言葉などで表現しながら不思議さに気付き知ろうとする。（自然との関わり）
- ・自分で楽しんだことを親しい人と共有するために、見通しをもって自己決定する。また、自分の事には自分で向き合い困った時には自分で発信し解決策を得る。（自立心）
- ・友だちとの様々な体験を重ねる中で、善悪の区別がわかり、自分をふりかえり、友だちの気持ちに共感したり相手の立場にたって調整したり、折り合いを付けながら生活する。（共同性 道徳性・規範意識の芽生え）

活動内容

◎年長組になって、2回目の宝の山での活動。この日は、『ばんちょ』こと都留市役所の佐藤洋学芸員の他に、たまたま宝の山に遊びに来ていた法泉寺住職『よっちゃん』こと廣島義隆さんと都留文科大の学生さんで森っ子クラブに所属し『自然を通しての子ども達の成長』についての勉強中の『ポンちゃん』こと鈴木あかねさんも活動に参加し、園のスタッフだけではない、いろいろな大人に見守られながら、子ども達の活動は開始した。



※前回の活動は、宝の山を下見し、それぞれがやりたい活動を楽しんだ。
(坂道ダッシュ・たき火・池での生き物観察など)

◎前回、子ども達の思いをまとめようとして、スタッフの配置のタイミングが上手くいかなかった反省を生かし、今回は子ども達ひとり一人の思いに応える『個人キャリア保育』を意識してスタッフの配置を考慮したことで、スムーズに動けることが出来たとたつき先生から感想を頂く。

スタッフ一人一人が『いま、子ども達は何を感じ、何をしようとしているか?』を見極める姿勢を持って取り組むことで、子どもへの対応が変わり、質の高い会話が生まれ、自己肯定感も高まる。私達スタッフも、『子ども達を預かり育てている子ども園』として、子ども達の成長を見守り手助けするためのスキルをより深めていけるよう、一緒に楽しみながら研鑽していきたい。



雨の中の芝生広場の坂道



◎前回遊んだ晴れの日と違い、雨の坂道は滑る！雨の中、わざわざ外に出て遊ぶ体験はあまりしたことはない。しかし、滑る坂道での遊びを通し『実は、雨の中でも楽しく遊べる?!』ということを感じている様子の子も。カッパを着たまま、お尻で滑る先生を見て、笑いも起きる。

雨の中の鬼ごっこで、もちろん靴の中もビショビショに…。『ぬれちゃった～』と気持ち悪がっていた子が、次々遊び込んでいくうちに、『靴の中の水が気持ちいい～』となり、さらに、靴を履いたまま水道で足を洗う姿があった。ぽんちゃんは、その姿が『印象的だった』と、雨の中での子ども達の気持ちの変化を感じたようだ。

一緒にあそぶ大人も楽しいと感じながら見守ることが大切なのだ。雨の日、いつもと違う特別な楽しい遊び場になる…。

◎小さい頃から、宝の山に遊びに来ていたという、よっちゃん。普段は、お坊さんだけど、木を切ったり自然の中での仕事も されているという。『子ども達と接しながらの自然体験活動は初めての経験で、気疲れしたけど楽しかった！また、携わってみたい』と、笑み付きでの感想。毎日、子どもと接している私たちにとっても、嬉しく心強い感想を頂く。子どもと一緒に活動したことで、よっちゃん自身が自分の幼い頃の体験と重なり、楽しさを共有したのではないだろうか。

◎写真は、『だって、替えの靴持って来たもん!』と、雨の中でも池の中へ入って遊ぶ子ども達(笑)それを優しく見守ってくれているよっちゃんである。

雨の中の池



雨の中のたき火



◎前回の経験・学びから、自分達で火を起こしてみようと雨の中でマッチを擦る子ども達。もちろん着かない…。さあ、どうする？考えた子ども達は、『雨が掛からない所なら…』と、木の下に行って試してみる。しかし、濡れたマッチではやっぱり着かない。

『たき火は、雨が嫌いなんだよ』とばんちょの言葉を聞いたT君は傘を作ろうと考えた。しかし、思うようには作れない。

◎子ども達なりに考え、実行してみたところで、ばんちょの登場。

まず、濡れてない薪をなたで割り、やぐらを作り、濡らした新聞紙で屋根を作る…という作業をばんちょがやって見せる。

いつもお父さんが言っている『見ているだけでも勉強』という言葉がR君がつぶやく。

そう、ばんちょは、雨の中で、実際に火が着くという現象をやって見せる事で子ども達に伝えたのだ。見て覚えること、真似ることが実体験へと繋がっていく。『新聞紙は、水より強い』ということも、この雨の中で、火を起こすことの出来たたき火を通して学ぶことが出来た。



◎次第に火が強くなり、『寒いからお湯を沸かそう!』とT君がやかんを持ってくる。やかんを火に掛けるのに、枝を利用することを思いつく。これも前回の経験が生かされていた。さあ、ちゃんとお湯になるか?!

しばらくして、やかんを火から下ろし、手を入れてみる…。『あ! お湯だ~!!』お湯の熱さにびっくりしたけど、思いがけないハプニングが、より一層“本当にお湯が沸いた”ということも、実体験として教えてくれたようだ。



雨の日の活動



◎雨の中の活動にあたり、園のカッパ・傘を用意し、それぞれが自分で、『どうするか?』を考えて雨具を利用した。

カッパを着れば両手は使える。カッパを着用した子は余裕を持って楽しんでいる姿が見られたが、傘を差した子は、“手が使えない”という不便さを知る。これも経験。次の時にはどうすれば良いかを学んだ。



◎雨の中、カッパなしでは30分で低体温になるとのこと。カッパを着用せず池に入った子も居たので、体力低下を避けるため早めの着替えを促した。

まだ、物足りない様子の子も居たが、年長児7月時点の子達には、体力的にまだ無理である。着替えが2セットあれば、午後も外で活動も出来るが、活動内容によっては、午睡や休憩も重要となってくる。

これから夏秋と過ごし体力も着いた頃、準備もしっかり整えて、また経験させてあげたい…と、この雨の中の活動を通し私自身が改めて学んだ。

この日の午後は、子ども達と考えた室内でのあそびを楽しんだ。

ふりかえりとその後 (子ども達の気づきや育ち)



◎園へ帰る前に、みんなでふりかえりタイム。いつもの様に発言したい子から話をしてもらおう。積極的に話したがる子・もじもじしてなかなか話せない子…と様々だが、全員が感想を話してくれた。同じような感想でも内容は違う。一人から深めていくことも大切なので、明日の園でのふりかえりも楽しみであると思いながら宝の山を下りた。

◎次の日、園で改めて、みんなでふりかえりをする。
みんなで作成中の地図の相違点も確認し合い、手直しも。

◎たき火を経験した子達が、『雨の日のたき火』の話をする。
友達の経験談を聞いて共有し、学びに変える。

実際に、雨に濡れたうちわとマッチを置いておく。匂いを嗅いでみたS君が『くさ〜い』と苦笑い。これも学び。

◎改めて、9月の自然体験の中で、みんなに『たき火』に挑戦してもらおうと思案中。

- ・たき火を通して自然を身近に感じ、発見・驚き・感動を友だちと共有し合いながら自ら活動する楽しさを味わう。
 - ・好奇心や探求心をもって考え、自分でやってみようとする。
 - ・マッチを擦ってみたり、うちわで扇ぐ等の経験に繰り返し挑戦し、火が着くことで達成感を味わう。
 - ・たき火を使い、自分たちで収穫したじゃがいもを茹でたり焼いたりして、食す経験を通し、生きる力を身に付ける。
- 等々

たき火の経験から学べることは沢山あるだろう…。

◎子ども達が自分で考え、判断し、行動する時に、コーナーにしておくとう有効的であるとのこと。

そこで、それぞれが返却する時に、『かっぱかたづけコーナー』を部屋に設置してみた。園の集団生活の中で、『返却する』という行動を、子ども達が自分自身でスムーズに取り組むことが出来、気が付けば、2日で全ての返却が完了していた。

『さすが、年長さんだな…』と、それぞれが意識して行動する姿に有効性を実感した。

◎毎回、自然活動の中で、その子の経験したこと、やってみようと思っていることを通し、その子自身の素の部分がよく見えてくると感じる。

『その子が何をみて、何を感じているか…。』

個々が色々と感じたり考えたりする経験を積むことが出来る個人キャリア保育。それを深めていくためには、

『雨の日も良い』と学んだ活動であった。



「学びを深めるために、学ぶのは誰なのか？」

■本当に学んでいるのか？大人たち…

「学ぶ」とはどういうことだろうか？学習の答えだしを急がされた私たち大人は、その答えを出すために答えを導き出すための過程という大切な手段を置き去りにしてきた。そればかりが要因ではないが、結果、子どもたちに見栄えや成果を重視した大人優先の思考や利己主義な考えが社会的考えと移り変わり、いつの間にか正しい方向へと変化していった。いつしか、大人たちはその指導方法を「良し」とし、評価もしなくなった。何が評価に値したのか？それは、平均点を獲ったり、みんなでそろって同じことをしたり、指導者の伝えたことをきちんとした姿勢で聞いたり、できたり、そろっていたり、同じ着こなしであったり、行動や作業が平均的に進んでいた、終わっていたりと右寄りでもなく左寄りでもなく、すべての子どもたちが真ん中に寄せられていた時代があった。実際今でもある。

大人が自分で自分の評価を正しくできなければ、子供など指導はできない。子どもは大人たちに歯向かうことはできない。特に幼児期はそうである。子供は常に大人たちの顔色や心の移り変わりを感じ取り生きている。大人は子どもの嘘を見抜いているが、子どもは大人の心を読み取っていることに気が付かなければ、学ぶことはできない。気づかなければ学びのスタートラインに立てないし、学びを深めることすらできない。つまり子どもと対等な関係でなければならない。呼び捨てで呼ぶ/呼ばれる、ニックネームで呼ぶ/呼ばれるということでもない、信頼関係が主従関係になっていないことが大切である。対外、主従関係になっており、そのパターンとして命令調であり、一斉保育型であることが多い、さらには時間軸で保育を淡々とこなし、いざこざなどの解決はすべて大人が介入する結果となっている。一斉保育のすべてを否定はしないし、自由保育のすべても否定しない。保育styleはあくまでスタイルであり、考え方が活かされていない場合が多い。この場合は、魅せる保育が優先されているパターンとなる。魅せる対象は保護者であり、その陰に園児獲得や園としてのpolicyやprideの確立の要素が伺い知ることができる。対外、この場合行事多数で保育士や幼稚園教諭が行事をこなすことに一所懸命で疲労困憊しているし、行事の目的も理解されておらず、結果行事の評価もできず、見た目美しい行事にすり替わっていることにも気が付けない状況である。離職率が上がりや定職率が下がり続ける要因でもあると分析している。

問題はここである。対外的な保育は何を生産してきたかということである。社会福祉法法人として学校法人としての目的の評価として、何を生産できたであろうか？学びはこのふりかえりから始まる。目的や子どもたちや大人、社会の成長や心の現在の現状を把握をしてこなかった保育はふりかえりの際に「事象」を語り続ける。起きたことを語るのは人間ならば表現の仕方は違えども誰でもできる。しかし、保育のスペシャリストがこれをしてしまえば、子どもも保護者も園へもふりかえりの生産はされない。日本は反省をとことんさせる悪しき文化であるために、ふりかえりの重要性はまだまだ認知不足となっている。ふりかえりには、内省と反省がある。自分の気持ちを素直に事象に対して伝えるものとその内省に対してどうあるべきかを問う反省というものがある。この内省と反省が合わさり、心が成長を遂げ、心の中の動きを活発化させていくのである。

学びを深めていくために、この内省と反省を大人たちができているか？その意味を理解していくかが、人間の心を形成していく生産性を高められるかのkeyになっている。

ダイヤはダイヤでしか磨けず、人間の心は人間でしか磨けないのだから、今学ぶべきは誰かはわかるはずである。

■青藍幼稚園との関わりがここから始まる

2013年のとある日、知人から紹介を受けた幼稚園関係者が私のもとを訪ねてきたことが当幼稚園との関わり始まりである。主題は「年長児がもっとたくましく育てほしいという願いがあり、自然体験活動を経験させたい。具体的にどんなことができるのか」と「子どもの主体性」について2つだけ質問を投げかけられたことを覚えている。

この2つの問いにこう返した。「園行事をこなすだけになっていないか？」「その行動は子供のためになっているのか？」言葉だけをると荒っぽい表現であるが、まさに今後の幼児教育の方向性を意味づける出会いとなった。

それ以来、自然保育をメインとした園外保育、親子行事、お泊り保育など保育や行事の目的、目的とスケジュールの整合性、保護者と教諭たちの現状把握、学校法人としての保護者と園児に対する役割の明確化などの協議を随時ならぬ散々、協議を重ねてきた。こうしてとある公的施設職員が園に出向いて、指導や協議を重ね、自然体験や自然保育を普及するスタイルは全国でも例がなく、国土緑化推進機構が編著している「森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック(風鳴舎)2018年」へ事例紹介されている。

アクティブラーニング(対話的:協働的学習のスタイル)方式で形作られた行事は2015年ごろよりその成果を顕著に表し始めた。ただ体験するだけのことが、教諭と園児から保護者までに巻き込んでいく、渦をつくる契機となる。それが「親子ほのぼのタイム」である。前半は、「人と自然の関係性をもつ」というねらいのもとに、保護者の養育現状に趣を置いた内容。Edgeの効いた寸劇で養育風刺に切れ込んだ。教諭たちの思いは寸劇という媒体を通じ、保護者自身が子育てを振り替えられる環境を提供していた。当然すべてに受け止めてもらえるわけでもないが、時間の問題であった。

次なる課題は保育の質の生産性を高めることである。ベルトコンベヤーで子どもたちを流しながら行う保育とそうでないアクティブラーニング式保育との融合であった。

園児や保護者の捉え方を十二分に協議し、ふりかえりを園は強化した。さもなくば、夜遅くまで協議は続き、活字化し、具現化し、内省と反省を繰り返す時間を毎度設けた。

結果、園児と教諭、保護者の関係は計り知れず、信頼関係に包まれる予定である。問題は尽きないものであり、その問題こそが学校法人として、社会問題の歪を治癒する役割があるものとして、園へ都留市が自然資源を生かした分野での保育サポートを継続している。

教諭たちは、ほどよい苦痛と苦悩を感じている。いちキュレーター公務員が園へやってきて、目的を設定する意味は…、子どもたちは今どんな状況と判断しますか？…、雨の日の子どもへの影響はなど土足で保育に踏み入れるスタイルは単なる迷惑に苦痛に過ぎない。

しかしながら、苦痛に向き合わなければその苦痛は楽にはならないし、問題から背を向ければ、園児たちも目を背ける体質が備わる。5歳児は敏感であり、規律や規範を形成する大切な時期であるがゆえに、幼児期の自然資源を活かした体験活動は重要なのである。自然と向き合い活動する中で知識が増え、子ども一人ひとりのありのままの姿と、集団性が表われる。体験ばかりを扱わず、心も扱うし、拾うし、寄り添うし…。Mindを取り扱うからこそ時間もかかるし、労力を惜しまないメンタリズムが指導者には常に問うている。この下地がpolicyなのである。policyの積み重ねがプライドを生産していくのだ。子どもも大人も生きる力の源となっている。

今一度、保育/幼児教育を学校法人としての観点から見つめ、ふりかえり、園児ならびに教諭らのキャリア(体験を経験に変え、積み重ねる意)保育にチャレンジしている過程である。打ち合わせも永遠に終わらない、ふりかえりは永久に終わらない、法人として社会を構築している一員であるから…。